

十七文字の抒情詩



新しい年はいかがでしょうか？
各地で大雪のニュースを聞きます。
地球全体が少しずつおかしくなっているようで、
地震の事も心配ですね。
こちらも二月になって急に雪が多く降ったり、
はっきりしない天候です。
俳句ではすっかり春の季節になっているというのに
なかなかそういう気分になれません。
そんな中健さん、うさおさんから投句がありました。

まず健さんの句です。



年明くる関帝廟の飾り龍



関羽の祠廟。年始の改まった気持ちで観る龍の飾りはまた格別でしょうね。
無駄な言葉を使わず季語と対象物のみ・・・それが逆に句に広がりを出しています。



古書街にカレーの香する四温かな



中七が良いですね。カレーの香という意外性、場所設定も季語も取り合わせが
すばらしいです。



三島手の器に煮物春立つ日



三島手の陶磁器には少し春らしい煮物が似合う・・・でも里芋の煮っ転がしも似合う
かな。季語と相まってその形まで見えてきます。佳い句です。

春めくや銀座和光の鐘の音

ようやく春の気配を感じる頃、人々は久しぶりにワクワクした思いでショッピングに
出かけるのでしょうか、中七に固有名詞を持ってこられた事が成功ですね。
健さんの句は添削の必要がないほど確かな句です。基本もきちんと出来ていて
しかも斬新さもあります。これからも佳句を見せてくださいね。



続いてうさおさんの句です。

暗闇の中からふわり淡い雪

良いですね。情景が浮かびます。
文語体にするなら

*暗闇の中よりふはり淡き雪





茶色の犬の頭に雪帽子

散歩の犬でしょうか、可愛い光景です。どんな犬かを色だけでなく具体的にするとより面白くなるのではないのでしょうか。

* 胴長の犬被りをり雪帽子

滑らない筈の靴底凍る路

滑らないはずの靴底って事は滑り止めをしてある靴という事ですよ。そういう事を入れると良いと思います。

* 滑り止めなど役立たず凍る路 * 道凍てる靴底にある滑り止め

空いた口雪か氷か飲み込んで

上を向いていると雪が口の中に降り込んでくる。そういう情景を詠まれたのですね。雪か氷か・・・本当にはそうなのでしょうがこの場合は雪と断定の方が綺麗な・・・上五の字余りはそれほど気にならないと思います。* 空仰げば雪舞ひ降りる口の中

うさおさんの良さはひねり過ぎない素直さです。思った事、感じた事、実際に体験した事、それをそのまま句にされているのはとても素晴らしい事なのです。このままの方法でどんどん作句して下さい。後はほんのひとひねり、言い回しを変える事でぐっと良い句になると思いますよ。

俳句は日々の日記のような物と言われた人がいます。その時々のお気持ちや、出掛けた場所の景色を切り取って詠む。もちろん川柳も同じだと思います。たった十七文字ですが、みなさんも難しく考えずに俳句作ってみませんか？

集落は五戸七人や野水仙

梅東風や鬼平のみる江戸古地図

流されてみやう運命に下萌ゆる ゆうこ

